The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	センター10周年を迎えて
Author(s)	高木, 修二
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1979, 34, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65418
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻　頭　言

センター10周年を迎えて

センター長　高　木　修　二

本センターが全国共同利用の大型計算機センターとして法制化されてから今年で満１０年となります。センター１０年の歩みは他の刊行物で紹介されると思いますので詳しくは述べません。最初ＮＥＡＣ２２００／５００というシステム１基から出発したセンターですが、それに比べて現在では桁違いに能力も処理量も増し、リモート・バッチ端末、ＴＳＳ端末も年毎に増加し、大型計算機センターとしてその機能を発揮している、ということだけを申しておきます。

１０年を１つの段階とすると次の１０年はどういう段階だろうか、ということを考えてみたいと思います。これまでの１０年はいわゆる科学技術計算の処理が主力でした。科学技術計算あるいは数値計算は今後も減ることはないでしょう。ますます複雑かつ長大な計算が行われるようになるでしょうから、ハードウェアの面でもそれに対処できなければならないでしょう。一方では応用プログラムのパッケージが数多くできて、定形的な計算はそれらを利用することが多くなると思います。そういう応用プログラムの整備もますます必要です。

科学技術計算が多いということからもわかるように、これまでの利用は理工系の研究のためのものが大半でした。これからは人文・社会系の方々の研究にも大いに役立てていただきたいと思っております。情報処理システムとしての計算機をこの方面でどのように利用できるか、私には専門が違うのでよく判りませんが、まだまだ開拓の余地があると思います。センターでこれから力を入れたいと考えているデータ・ベースもそのお役に立てると思います。データ・ベースというと大規模なものを連想しがちですが、要するにデータ（これは数値データに限らず、文字情報その他も含みます）を収積し整理し必要に応じて引出せるファイルを作る、と考えて下さい。そういうものが気軽にできるようなソフトウェアや入出力機器を備える必要があります。センターの今後の課題の１つです。

もう１つの課題としてネットワークがあります。既にリモート・バッチやＴＳＳなど伝送線経由の計算処理は件数ではローカル・バッチ（センターに来て入出力を行う）より多くなっています。この傾向はますます増大するでしょう。そういう、センター中心のいわゆるローカル・ネットワークを拡張して、他のセンターとも接続した全国的なネットワークを張る計画が既に進められています。これの実現は時間の問題です。

ネットワークの目的は全国のこの方面のリソースを有効に利用することにあります。それが有効

に機能するためには、各センターがそれぞれ特徴のあるリソースを備えることが望ましいと考えられています。大型計算機センターは全国共同利用ではありますが、その研究開発は何といってもセンター周辺の研究者に依拠しております。各方面の研究に密着した、それぞれの研究に根ざした特徴あるリソース（ソフトウェアもハードウェアも）の作成、あるいは作成についての要請、が活発に行われることを期待しております。